

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(1)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
Armstrong et al. [13] 2009, アメリカ/カナダ	後向きコホート	①生存率 ②二次がん発症リスク, 慢性疾患発症率, 内分泌/神経系/感覚障害の発症率 ③社会的状況(学歴, 結婚, 就労等)を明らかにする. ④③について対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ⑤頭部放射線照射量, 照射部位が③に与える影響を明らかにする.	中枢神経系悪性腫瘍(N=1,877) 女性44.9% 診断時年齢:中央値=7.5(範囲0-20) 調査時年齢:0-14歳:13.4%, 15-19歳:19.9%, 20-24歳:23.5%, 25-29歳:21.5%, 30-34歳:16.8%, 35歳以上:6.9%	きょうだい(N=3,899) 女性51.9% 調査時年齢:0-14歳:11.1%, 15-19歳:16.8%, 20-24歳:17.3%, 25-29歳:21.5%, 30-34歳:16.8%, 35歳以上:19.9%	就労率 【統計解析手法】 多重ロジスティック回帰分析(年齢, 性別, 人種を調整) (きょうだい間相関の調整:一般化推定方程式)	④対照群の方が中枢神経系腫瘍経験者よりも就労率が有意に高い(RR=1.4, 95%CI=1.3-1.5, p=-)
Boman and Bodegard [41] 2004, スウェーデン	横断	①病気による社会的影響(生活状況, 教育, 家庭, 出産, 就労, 余暇活動)を評価する ②①について重篤な病気を有さない対照群と比較し違いがあるか明らかにする.	複数のがん種(N=30) 女性50% 診断時年齢:平均=8.29(SD=3.9) 調査時年齢:平均=21.6(SD=2.9)	対照群(1):年齢・性・居住地が対象者と同等な者(N=30) 女性50% 調査時年齢:平均=21.9(SD=2.9) 対照群(2):年齢・居住地域でマッチングさせた, スウェーデンの一般人口統計	雇用形態別就労割合 【統計解析手法】 記述統計	②有給職業:小児がん経験者73%, 対照群(1)80% ②終身雇用:小児がん経験者77%, 対照群(1)88%, 対照群(2)81% ②パートタイム就労:小児がん経験者17%, 対照群(1)13%, 対照群(2)15%
Boman et al. [14] 2010, スウェーデン	後向きコホート	①長期的アウトカム(学歴, 就労, 収入)について対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ②がん種と長期的アウトカムの関係を明らかにする.	複数のがん種(N=1,716) 女性48.8% 診断時年齢:- 調査時年齢:平均31.6(SD=-)	同時期に生まれてがん既往歴のない人(N=1,456,089) 女性48.3% 調査時年齢:平均=32.7(SD=-)	就労割合, 収入 【統計解析手法】 記述統計 ロジスティック回帰分析 線形回帰分析 (年齢と居住地, 社会的状況, 母親の出生国で調整)	①就労割合:小児がん経験者84.0%, 対照群77.0% ①中枢神経系腫瘍経験者の方が対照群よりも就労割合が有意に低い(OR=0.85, 95%CI=0.77-0.94, p=-) ①その他のがん種と対照群を比較して就労割合に有意差なし(OR=0.95, 95%CI=0.87-1.03, p=-) ①障害補償を受けている者を除外した解析では小児がん経験者と対照群の就労割合は同程度(中枢神経系腫瘍:OR=0.98, 95%CI=0.88-1.10, p=-, 白血病:OR=1.02, 95%CI=0.92-1.13, p=-, その他がんと: OR=0.99, 95%CI=0.90-1.08, p=-) ①中枢神経系腫瘍経験者の方が対照群よりも平均手取り額が有意に低い ^(a) β=-57,609(p<.001). 障害補償を受けている者を除外した解析でも, 中枢神経系腫瘍経験者の平均手取り額は対照群より有意に低い ^(a) β=-24,461, p<.001)

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(2)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
Cheung and Mok [28] 2013, 中国(香港)	横断	①心理社会的適応状況(学業, 就労, これらへの意欲など)を対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ②職業訓練, ソーシャルワークサーピス, ユースセンター, ボランティア参加は小児がん患者と対照群の心理社会的適応に役立つかを明らかにする. ③小児がんの診断, 治療, 人口統計的特性は, 心理社会的適応やサービス利用に影響するか明らかにする.	複数のがん種(N=137) 女性48.2% 診断時年齢:平均=7.1(SD=-) 調査時年齢:平均=18.4(SD=-)	きょうだい(N=101) 女性46.6% 調査時年齢:平均=18.6(SD=-)	就労割合 【統計解析手法】 記述統計 共分散構造分析 (年齢, 性別で調整) (きょうだい間相関の調整:ランダム効果としてモデル化し一般化推定方程式で調整)	①小児がん経験者と対照群を比較して就労割合に有意差なし ^(b) β =0.034)
Dieluweit et al. [27] 2011, ドイツ	横断	①就労状況を明らかにする. ②学業, 職業の達成状況(就労開始年齢)を明らかにする. ③①②を対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ④②への関連要因を明らかにする.	思春期発症の複数のがん種(N=820) 女性51.0% 診断時年齢:平均=15.8(SD=0.9) 調査時年齢:平均=29.9(SD=6.0)	German Socio-Economic Panel Study (N=820) 女性:50.1% 調査時年齢:平均=30.4(SD=6.7)	就労割合, 就労開始年齢 【統計解析手法】 多重ロジスティック回帰分析 COX回帰分析 就労割合(性別, 年齢, 学歴で調整) 就労開始年齢(年齢でマッチ, 学歴で調整)	①思春期発症がん経験者と対照群を比較して就労割合に有意差なし(OR=1.11, 95%CI=0.83-1.47, n.s.) ②思春期発症がん経験者の方が対照群よりも就労開始年齢が遅い(OR=1.90, 95%CI=1.67-2.17, p<.001)
Dowling et al. [25] 2010, アメリカ	後向きコホート	①小児がん罹患による負担(健康状態, 日常生活の制限, 職務遂行状況, 仕事量と仕事の種類, 欠勤状況)を対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ②小児がん罹患による負担(健康状態, 日常生活の制限, 職務遂行状況, 仕事量と仕事の種類, 欠勤状況)への関連要因を明らかにする.	複数のがん種(N=410) 女性53.08% 診断時年齢:- 調査時年齢:- (範囲18-39)	がん経験のないNational Health Interview Surveyの対象者(N=294641) 女性51.49% 調査時年齢:- (範囲18-39)	過去1年の就労割合, 健康問題による職務遂行状況, 仕事量と仕事の種類の制限状況, 過去1年の欠勤日数 【統計解析手法】 多重ロジスティック回帰分析 (年齢, 性別, 調査年, 人種を調整)	①小児がん経験者の方が対照群よりも過去1年の就労割合が低かったが有意差なし(小児がん経験者67.8%, 対照群73.9%, p=.061) ①小児がん経験者の方が対照群よりも健康問題による職務遂行不可の割合が有意に高い(小児がん経験者20.9%, 対照群6.3%, p<.001) ①小児がん経験者の方が対照群よりも健康問題による仕事の量と仕事の種類の制限が有意に高い(小児がん経験者30.9%, 対照群10.6%, p<.001) ①小児がん経験者の方が対照群よりも過去1年の欠勤日数が有意に多い(小児がん経験者平均=40.2日, 対照群平均=15.1日, p<.001)

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(3)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
Ellenberg et al. [22] 2009, アメリカ/カナダ	後向きコホート	①神経認知機能を明らかにする。 ②適応アウトカム(教育, 就労, 収入, 結婚)を対照群と比較し違いがあるか明らかにする。 ③神経認知機能の状態と適応アウトカム(教育, 就労, 収入, 結婚)の関係を明らかにする。	中枢神経系腫瘍(N=802) 女性47.8% 診断時年齢:平均=8.5(SD=-) 調査時年齢:平均=31.5(SD=7.1)	きょうだい(N=382) 女性52.4% 調査時年齢:平均=34.1(SD=8.4)	フルタイム就労割合【統計解析手法】 比率の検定(ブートストラップ法を用いてp値を算出) (きょうだい間相関の調整:ブートストラップ法)	②中枢神経系腫瘍経験者の方が対照群よりもフルタイム就労割合が有意に低い(中枢神経系腫瘍経験者44.0%, きょうだい69.9%, p<.001)
Freycon et al. [42] 2014, フランス	後向きコホート	①就学 ②就労状況を前処置が全身放射線照射群, 化学療法群, 対照群と比較し違いがあるか明らかにする。	小児白血病または骨髄異形成症候群の造血幹細胞移植者(N=78) ・前処置全身放射線照射(FTBI)群(N=59) 女性54.2% 診断時年齢:中央値=9.1(範囲1.1-14.6) 調査時年齢:中央値=23.0(範囲18.0-38.2) ・前処置化学療法(CT)群(N=19) 女性50% 診断時年齢:中央値=5.8(範囲0.4-14.4) 調査時年齢:中央値=20.8(範囲18.0-29.3)	フランス一般人口 French National Institute for Statistics and Economic Studies(INSEE)のローヌ・アルプス地方在住者データ	職種【統計解析手法】 ポアソン回帰分析 フィッシャーの正確確率検定 (性別で層化)	② f TBI群:小児白血病または骨髄異形成症候群の造血幹細胞移植経験者と対照群を比較して職種分布に有意差なし。しかし, 性別で見ると女性のFTBI群の方が中級レベルの専門家(看護師, 教師, 技術者など)が有意に多い(O/E値=2.4, 95%CI=1.2-4.2, p=-) ②CT群:小児白血病または骨髄異形成症候群の造血幹細胞移植経験者と対照群を比較して職種分布に有意差なし

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(4)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
Hays et al. [43] 1992, アメリカ	横断	①教育 ②就労 ③適切な健康保険・生命保険を得ることができているかを対照群と比較し違いがあるか明らかにする.	複数のがん種(N=219) ・ Hospital Los Angeles (CHLA) (N=110) 女性45.6% 診断時年齢:-(19歳未満) 調査時年齢:平均=33.9(SD=-) ・ Dana-Farber Cancer Institute (DFCI)(N=113) 女性55.0% 診断時年齢:-(19歳未満) 調査時年齢:平均=35.8(SD=-)	対象者と同姓, 年齢差が2歳以内のきょうだい.対象者と青年期につきあいがある同性の友人 CHLA(N=79) 女性45.6% 調査時年齢:平均=33.9(SD=-) DFCI(N=111) 女性55.0% 調査時年齢:平均=34.9(SD=-)	年収 【統計解析手法】 記述統計	②年収\$15000以下:中枢神経系腫瘍経験者54.6%, 中枢神経系腫瘍以外のがん経験者21.6%, 対照群17.7%
Kirchhoff et al. [26] 2011, アメリカ	後向きコホート	①就労状況(非就労率, 職種, 年収)について, 対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ②非就労の関連要因を明らかにする.	複数のがん種(N=6,671) 女性49% 診断時年齢:4歳以下:26.7%, 5-9歳:25.4%, 10-14歳:25.9%, 15歳以上:21.9% 調査時年齢:25-34歳:57%, 35-44歳:34%, 45歳以上:9%	きょうだい(N=2,129) 女性55% 調査時年齢:25-34歳:46%, 35-44歳:38%, 45歳以上:16%	非就労率, 職種, 年収 【統計解析手法】 多重ロジスティック回帰分析(非就労率, 職種に対して) 順序ロジスティック回帰分析(年収に関して) 雇用形態を調整 (家族間相関の調整: ロバスト分散の推定)	①小児がん経験者の方が対照群よりも非就労率が有意に高い (RR=1.45, 95%CI=1.32-1.60, p<.001) ①小児がん経験者の方が対照群よりも専門職に就く人が有意に少ない (RR=0.93, 95%CI=0.89-0.98, p=.003) ①小児がん経験者の方が対照群よりも年収\$20000以下が有意に多い (p<.05) ①小児がん経験者の方が対照群よりも年収\$40000以上が有意に少ない (p<.05)

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(5)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
Kirchhoff et al. [15] 2010, アメリカ	後向きコホート	①就労率, 求職者の就労率を対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ②非就労の関連要因を明らかにする.	複数のがん種(N=6,339) 女性45% 診断時年齢:4歳以下26.9%, 5-20歳73.1% 調査時年齢:平均=34.2(SD=6.2)	きょうだい(N=1,967) 女性49.6% 調査時年齢:平均=36.0(SD=7.2歳)	非就労率 【統計解析手法】 多変量相対危険度回帰分析 (年齢, 性別, 人種で調整) (きょうだい間相関の調整: 一般化線形モデル) 単変量解析	①小児がん経験者の方が対照群よりも非就労率が有意に高い(RR=6.07, 95%CI=4.32-8.53, p=-) ①小児がん経験者の方が対照群よりも求職者の非就労率が有意に高い(RR=1.90, 95%CI=1.43-2.54, p=-) ①高卒以下の経験者の方が対照群よりも健康関連の非就労割合が有意に高い(小児がん経験者49%, 対照群26%, OR=-, 95%CI=-, p<.001) ①高卒以下の経験者の方が対照群よりも求職者の非就労割合が有意に高い(小児がん経験者27%, 対照群17%, OR=-, 95%CI=-, p<.001)
Maddrey et al. [16] 2005, アメリカ	横断	①実行機能領域を含む神経認知機能を調査する. ②日常機能(就労を含む) ③QOLを評価する. ④②③について, 対照群と比較し違いがあるか明らかにする.	髄芽腫(N=16) 女性63% 診断時年齢:平均=7.3(SD=4.5) 調査時年齢:平均=21.9(SD=3.6)	一般人口 *アメリカ政府発行あるいは州発行のデータ	就労割合 【統計解析手法】 カイ2乗検定	④髄芽腫経験者の方が対照群よりも就労割合が有意に低い(p=.001)
Mody et al. [17] 2008, アメリカ/カナダ	後向きコホート	①診断後25年時の累積生存率 ②健康状態 ③慢性症状の累積発症率を明らかにする. ④結婚, 学歴, 就労, 健康保険加入について, 対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ⑤結婚, 学歴, 就労, 健康保険加入について治療法(放射線治療の有無), 初発から5年以内の再発の有無, と関連があるかを明らかにする.	小児急性リンパ芽球性白血病(N=4,151) 女性46.7% 診断時年齢:中央値=4(範囲0-21) 調査時年齢:中央値=26	きょうだい(N=3,899) 就労解析部分(N=1,941) 女性49.6% 調査時年齢:-(範囲25-49)	非就労割合 【統計解析手法】 ロジスティック回帰分析(性別で層化, 人種, 年齢で調整) (家族間相関の調整: ブートストラップ法)	④女性小児リンパ芽球性経験者の方が対照群よりも非就労割合が有意に高い(p=.01) ④男性小児急性白血病経験者と同性の対照群を比較して非就労割合に有意差なし(p=.07) ④放射線治療を受けていない非再発男性小児リンパ芽球性経験者と同性の対照群を比較して非就労割合に有意差なし(p=.96) ④放射線治療を受けていない非再発女性小児リンパ芽球性経験者と同性の対照群を比較して非就労割合に有意差なし(p=.55)

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(6)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
Mulrooney et al. [18] 2008, アメリカ	後向きコ ホート	①生存率を明らかにする ②結婚, 教育, 就労, 健康保険の状況を対照群と比較し違いがあるか明らかにする.	急性骨髄性白血病(造血幹細胞移植なし)(N=272) 女性54.4% 診断時年齢:中央値=6(範囲0-20) 調査時年齢:中央値=27(範囲10-49)	対照群(1):きょうだい(N=3,899) 女性48.2% 調査時年齢:中央値=31(範囲3-58) 対照群(2):アメリカの一般人口データ	就労割合 【統計解析手法】 ロジスティック回帰分析(年齢で調整) (家族間関連の調整: ブートストラップ法)	②25歳以上の急性骨髄性白血病経験者の方が対照群(1)よりも就労割合が有意に低い(急性骨髄性白血病経験者93.2%, 対照群(1)97.6%, p=.07) ②25歳以上の急性骨髄性白血病経験者と対照群(2)を比較しての就労割合に有意差なし(急性骨髄性白血病経験者93.2%, 対照群(2)95.8%,p=.2)
Nagarajan et al. [19] 2003, アメリカ	後向きコ ホート	①教育 ②就労 ③健康保険 ④結婚 について対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ⑤①～④と属性, がん種, 治療法, 社会的状況等との関連を明らかにする.	下肢または骨盤の骨肉腫あるいはユーイング肉腫(N=694) 女性49.1% 診断時年齢:中央値=16.0(範囲6-28) 調査時年齢:中央値=30.0(範囲18-45)	きょうだい(N=2,667) 女性53.1% 調査時年齢:平均=29.0(範囲18-56)	昨年の就労割合, 就労経験 【統計解析手法】 多重ロジスティック回帰分析(調査時年齢, 性別で調整) (家族間関連の調整: 一般化推定方程式)	②下肢または骨盤の骨肉腫あるいはユーイング肉腫経験者の方が対照群よりも就労割合が有意に低い(OR=0.3, 95%CI=0.26-0.43, p<.005) ②12歳以下で下肢の切断をうけた者, 13歳以上で下肢の切断をうけた者, 13歳以上で温存術をうけた者の方が対照群よりも昨年の就労割合が有意に少ない(12歳以下で下肢の切断をうけた者:OR=0.2, 95%CI=0.16-0.37, p<.005, 13歳以上で下肢の切断をうけた者:OR=0.3, 95%CI=0.21-0.43, p<.005, 13歳以上で温存術をうけた者:OR=0.4, 95%CI=0.26-0.71, p<.005) ②下肢または骨盤の骨肉腫あるいはユーイング肉腫経験者の方が対照群よりも就労経験が有意に少ない(OR=0.3, 95%CI=0.17-0.51, p<.005) ②12歳以下で下肢の切断をうけた者および13歳以上で下肢の切断を受けた者の方が対照群よりも就労経験が有意に少ない(12歳以下で下肢の切断をうけた者:OR=0.2, 95%CI=0.11-0.43, p<.005, 13歳以上で下肢の切断を受けた者:OR=0.2, 95%CI=0.07-0.58, p<.005)
Pang et al. [23] 2008, アメリカ	後向きコ ホート	①就労状況を対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ②がんの診断および認知障害や身体的障害をとまなう治療は, 非就労のリスクを上昇させるかを明らかにする.	複数のがん種(N=10,399) 女性44% 診断時年齢:中央値=10.0(範囲0-21) 調査時年齢:中央値=26.0(範囲18-48)	きょうだい(N=3,083) 女性51.1% 調査時年齢:中央値=29.3	就労経験 【統計解析手法】 多重ロジスティック回帰分析(調査時年齢, 性別で調整) (家族間関連の調整: 一般化推定方程式)	①小児がん経験者の方が対照群よりも過去の就労経験がない者の割合が有意に高い(小児がん経験者5.6%, きょうだい1.2%, OR=3.7, 95%CI=2.6-5.1, p<.0001)

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(7)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
Pastore et al. [32] 2011, イタリア	後向きコホート	健康状態と社会生活の達成度(教育, 就労, 結婚)を対照群と比較し違いがあるか明らかにする.	複数のがん種(N = 485) 男女比1.34 診断時年齢:中央値=7.5(範囲1-14) 調査時年齢:平均=24.3(SD=5.9)	イタリアピエモンテ州一般市民	就労割合 【統計解析手法】 O/E比(年齢で調整)	良好な健康状態の小児がん経験者の方が対照群よりも就労割合が有意に高い(O/E=123.5, 95%CI=107-142, p=-) 不良な健康状態の小児がん経験者と対照群を比較して就労割合に有意差なし(O/E=88.6, 95%CI=71-109, p=-)
Pui et al. [21] 2003, アメリカ	横断	①生存率, イベントフリー生存率, 晩期合併症発症率を明らかにする. ②健康保険の適用, 結婚, 就労状況を対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ③健康保険の適用, 結婚, 就労に放射線治療の有無が影響しているか明らかにする.	10年以上寛解状態の急性リンパ芽球性白血病経験者(N = 856) 女性51.1% 診断時年齢:中央値=4.5(範囲0.2-20) 調査時年齢:中央値=14.6(範囲10.3-30.2)	アメリカの一般市民	非就労割合, フルタイム就労割合 【統計解析手法】 ロジスティック回帰分析(性別で層化, 年齢で調整)	②放射線治療を受けた経験者の方が対照群よりも非就労割合が有意に低い(女性経験者群35.4%, 女性対照群5.2%, 95%CI=27.0-44.1, p=-, 男性経験者群15.1%, 男性対照群5.4%, 95%CI=9.2-22.7, p=-) ②放射線治療を受けた女性経験者の方が女性の対照群よりもフルタイム就労割合が有意に低い(女性経験者群51.4%, 女性対照群71.8%, 95%CI=42.3-60.4, p=-) ②放射線治療を行っていない経験者と対照群を比較してフルタイム就労割合に有意差なし(女性経験者群63.8%, 女性対照群61.6%, 95%CI=47.3-77.8, p=-, 男性経験者群86.5%, 男性対照群72.5%, 95%CI=68.8-95.9, p=-)
Punyko et al. [24] 2007, アメリカ	後向きコホート	①身体的後遺症と人生の達成度(教育, 就労状況, 結婚や長期の恋人関係) ②就労状況を対照群と比較し違いがあるか明らかにする. ③身体的後遺症と人生の達成度に関連性はあるか明らかにする.	横紋筋肉腫(N = 417) 女性43% 診断時年齢:0歳:5.3%, 1-4歳:28.5%, 5-9歳:27.1%, 10-14歳:22.5, 15-20歳:16.5% 調査時年齢:中央値=26(範囲-)	きょうだい(N = 2,865) 女性53% 調査時年齢:中央値=28(範囲-)	昨年の就労割合, 過去の就労経験 【統計解析手法】 カイ2乗検定(就労割合に対して) マンテル=ヘンツェル検定(過去の就労経験に対して)	②横紋筋肉腫経験者と対照群を比較して昨年の就労割合に有意差なし(横紋筋肉腫経験者89.0%, 対照群91.4%, p=.77) ②横紋筋肉腫経験者の方がきょうだいよりも過去の就労経験のある者の割合が有意に低かった(横紋筋肉腫経験者96.9%, 対照群98.7%, p=.03).年齢別に対照群と比較したところ, 25-45歳の対照群の方が, 過去に就労経験のある者の割合が有意に高かった(横紋筋肉腫経験者97.5%, 対照群99.5%, p=.01).性別で対照群と比較したところ, 男性の対照群の方が, 過去に就労経験のある者の割合が有意に高かった(横紋筋肉腫経験者96.6%, 対照群96.8%, p=.03).人種別に対照群と比較したところ, 白人の対照群の方が, 過去に就労経験のある者の割合が有意に高かった(横紋筋肉腫経験者96.9%, 対照群99.0%, p=.01).

資料2 就労の問題に関する量的研究結果(8)

著者 発行年, 国	研究 デザイン	研究目的	対象者の背景	対照群の背景	就労に関するアウトカム【統計解析手法】	就労の問題（研究目的とその結果）
van Dijk et al. [29] 2010, オランダ	横断	①日常生活上の制限に対する認識と、それに付随する情動と心配の程度を明らかにする。 ②教育, 就労, 結婚状況を対照群と比較し違いがあるか明らかにする.	網膜芽細胞腫(N = 156) 女性57% 診断時年齢:平均=1.7(SD=1.8) 調査時年齢:平均=20.8(SD=8.1) 就労解析部分(N = 92) 女性62% 調査時年齢: 18-35歳	オランダの一般人口	就労割合 【統計解析手法】 カイ2乗検定	②網膜芽細胞腫経験者と対照群を比較して就労割合は同等であった(p= -)
Yagci-Kupeli et al. [20] 2013, トルコ	横断	①最終学歴, 就労状況, 喫煙状況, 結婚, 保険について対照群と比較し違いがあるか明らかにする。 ②①に関連する要因(人口統計学的および医学的要因)を明らかにする.	固形腫瘍(N = 201) 女性37.4% 診断時年齢:中央値=10(範囲1-19) 調査時年齢:中央値=23(範囲18-39)	トルコの一般市民	非就労割合 【統計解析手法】 カイ2乗検定	②固形腫瘍経験者の方が対照群より非就労割合が有意に高い(固形腫瘍経験者36.8%, 対照群11.7%, p<.001)

SD=標準偏差, OR=オッズ比, RR=相対危険度, 95%CI=95%信頼区間, O/E=観測値/期待値, ^{a)}β=偏回帰係数, ^{b)}β=標準化総合効果
性別, 診断時年齢(平均, SD, 中央値, 範囲), 調査時年齢(平均, SD, 中央値, 範囲), p値について文献に記載のないものは「-」とした。
OR, RR, 95%CIについて文献に記載のないものは表記せず。